

II

2021年度入試問題 問題構成・出題の意図

II 01 国語

出題方針および問題構成

国語力には、読解力や思考力、表現力など様々なあると思いますが、それをもう少し分かりやすく言うならば、それはすなわち、筆者の考えや登場人物の心情を正しく理解し、身の回りのことや社会に置き換えて考え、自分なりの意見や感想を持ち、それを相手にしっかり伝わるよう上手に表現するという力でしょう。本校の入試問題は、そうした力をバランスよく見ることを意図しており、問題形式についても様々です。言葉や表現の意味及び表現技法、接続詞や指示語、登場人物の心情や内容の理解、また、ちがいや理由の説明、漢字の読み書き等、色々な形式の問題をとり交ぜて出題しています。そうしてそれらを通じて、文章を論理的に読解する力や登場人物の心情を正しく読み取る力、想像し思考する力、自分の言葉で正確に表現する力、また言葉の知識や漢字の読み書きなど、国語で必要とされる様々な力を幅広く見ています。

本校が例年、国語で出題する文章は、説明的文章が一編と、文学的文章が一編です。また、ここ数年は漢字を独立問題として出題することが多く、合計3題となっています。入試本文については、今の子ども達にぜひ読んでもらいたい、考えてもらいたいと思う読み応えのある文章を選ぶよう心がけていますので、過去問題などに取り組んだ際に興味を持った文章があれば、ぜひ本を手にとって豊かな読書経験につなげてほしいと願っています。

記述問題については、20～50字程度の短いものが数題と、70～100字程度の長い記述が1題という形を、例年取っています。長い記述問題は、本文の内容を要約するものもあれば、受験生自身の体験を想像も含めて、本文の内容と関わらせて書くものもあります。昨今の大学入試改革の流れを受け、思考力や表現力が今後一層重視されようという観点から、本文を踏まえて現代社会のあり様や自分のあり方にまで考えを広げる、思考力を問うような記述問題も、ここ数年よく出題しています。

尚、入試本文については**2019年度入試第三回**のように、随筆を出題することもあります。随筆は説明的文章、文学的文章両方の要素があるため、その文章の特徴に応じて出題しています。

文学的文章の出題意図

文学的文章における読解の中心は、登場人物の心情の変化にあります。登場人物の内面は、その表情や態度はもちろんのこと、周りの情景描写にも反映されていることが少なくありません。また、たとえを用いて心情を語ることもあります。つまり登場人物の言動や情景描写、それを表す比喩表現など、文中にある様々な手がかりをもとに、主人公の心情がどう変化したのかを読み解いていくことが大切です。文学的文章を読む際には、ただストーリーをたどるだけではなく、登場人物の表情や仕草、態度、周囲の情景描写など一つひとつの表現にじっくりと向き合いながら読んでほしいと思います。

登場人物の言動から心情を読み取る例としては、**2021年度入試第一回**の問十や**第二回**の問五、問十二、問十五、情景描写を用いて心情を語る例としては、**2019年度入試第一回**の問三

や**2021年度入試第二回**の問九などが挙げられ、また比喩表現を用いて心情を表す例としては、**2021年度入試第一回**の問八や**第二回**の問一などが挙げられます。

説明的文章の出題意図

説明的文章における読解の中心は、文章全体の組み立てに気をつけながら読み、筆者の言いたいことをつかむということです。説明的文章というと難しい印象があるかもしれませんが、筆者の言いたいことは基本的に1つです。その1つのことについて手を変え品を変えて説明しているだけですから、筆者の主張の流れを考えながら読んでいきましょう。説明的文章を読み解く際には、具体と抽象、対比関係、くり返し表現、原因と結果などいくつか意識すべきポイントがあります。それらのポイントに気をつけながら、文章の組み立てを考えていくとよいでしょう。また、文章の要点を把握するためには、語彙力つまり言葉の知識が不可欠なため、そうした知識があるかどうかを問うようになっています。

具体と抽象を意識して解く問題の例としては、**2020年度入試第二回**の問二や**2021年度入試第一回**の問三、**第二回**の問八など、また、対比的な述べ方の理解を問う例としては、**2019年度入試第三回**の問九や**2020年度入試第二回**の問六など、くり返し表現をヒントに解答する例としては、**2020年度入試第一回**の問八や**2021年度入試第一回**の問八など、原因と結果の関係をヒントに解答する例としては、**2021年度入試第一回**の問九や**第二回入試**の問四、問五などが挙げられます。

漢字の出題の意図

小学校での学習の範囲から出題しますが、日常会話の中で用いるような言葉だけでなく、様々な文章を読みこなし、考察するための語彙力を持っているかどうか、つまり言葉の知識を問うものであることも、本校の漢字問題の意図するところです。漢字や語句問題なども結局は語彙、つまり言葉の知識と結びついています。目や耳から入ってくる情報で、意味のはっきりしない言葉に出会ったら、あいまいなままにせず、こまめに辞書を引いて調べる習慣をぜひ付けましょう。人は言葉を知ること、より深く正確に自分の心情を理解し、また相手に伝えることができるようになります。言葉を知るとは、自分や社会を知ることにつながるのです。そうした意味で、普段から言葉を意識して生活してほしいと思います。

例えば**2020年度入試第一回**の「参画」、**第二回**の「枚挙」、**第三回**の「雨垂れ」、**2021年度入試第一回**の「永世」「存亡」、**第二回**の「照準」などは、小学生の日常会話中にはなかなか出てこないでしょうが、上記の意図の下に出題しています。新聞や幅広いジャンルの本を読むという習慣を、ぜひ大切にして下さい。文章の中で自然に身についた語彙こそが、国語力の基盤となります。